

いちろうちゃんのブログ

2022年4月16日(土)

ウクライナ情勢(15): 日刊 IWJ ガイド(2022.4.16号~No.3502号) & (メール転送です) スイス陸軍大佐、軍事情報専門家であるジャックス・ボー氏へのインタビュー

前略、田中一郎です。
(略)

<号外のお知らせ>

日本政府・マスメディア・御用学者らの偏向発言を信じるな! 「ウクライナで何が起きているのか」についての最も明確で包括的な説明の決定版!! 元スイス戦略情報部大佐で東欧専門家のジャック・ボー氏が「ウクライナで起きていること」について明確で合理的に説明!! 「分離・独立派」は分離も独立も求めていなかった! ~第一部・戦争への道

.....

3. (今日のIWJ日報でも紹介されているジャックス・ボー氏へのインタビューは下記ではないかと思われる)

(メール転送です)

スイス陸軍大佐、軍事情報専門家、NATOと国連の代理人であるジャックス・ボー氏へのインタビュー

「ロシアの戦争へのアプローチは、

米国のそれとは非常に異なっている」

☆ ボーさん、あなたは戦争が起きている地域を知っていますが、ウクライナで起きていることからどのような結論を導き出しましたか?

私はこの地域のことをよく知っています。私はFDFA(スイス外務省)に所属し、彼らの代理としてNATOに5年間出向しました。私の仕事は、致命的兵器の拡散に対抗することで、その立場で2014年以降のウクライナのプログラムに貢献しました。また、以前は戦略的諜報活動をしていたため、ロシア、NATO、ウクライナのことをよく知っています。私はロシア語を話し、欧米ではほとんど読まれていない文書にアクセスすることができます。

☆ あなたはウクライナ情勢の専門家です。職業柄、現在の危機的状況をどのように受け止めていますか?

狂っている、本当のヒステリーが起きているとさえ言えるでしょう。私が驚き、そして非常に気になるのは、ロシアがなぜこの作戦を開始したのか、誰も問わないことです。誰も戦争を擁護したくはないし、

私もそうだ。しかし、ニューヨークの国連平和維持活動局で2年間「政策・ドクトリン」を担当していた私は、いつも自問自答している。「なぜ戦争を始めるに至ったのか？」

☆ 国連ではどのような仕事をされたのですか？

国連は、戦争がどうして起こるのか、平和をもたらす要因は何か、犠牲者を出さないために何ができるか、どうすれば戦争を防げるかを理解する必要があった。戦争がどうして起こるのかがわからなければ、解決策を見出すことはできません。まさにこの状況です。どの国もロシアに対して独自の制裁を課していますが、これがどこにも通用しないことはよく分かっています。特に印象的だったのは、フランスの財務大臣が「ロシア国民を苦しめるために、ロシアの経済を破壊したい」と発言したことです。このような発言は言語道断です。

☆ ロシアの攻勢をどう評価していますか？

他国を攻撃することは、国際法の原則に反します。しかし、そのような判断に至った背景も考えなければなりません。まず、プーチンが狂っているわけでも、現実から遊離しているわけでもないことをはっきりさせなければなりません。几帳面で、システムチックな人、つまりとてもロシア的な人です。彼はウクライナでの作戦の結果を知っていたのだと思います。ドンバスの住民を守るための「小規模」な作戦でも、ドンバスの住民とロシアの国益を優先した「大規模」な作戦でも、結果は同じだろうと、明らかに正しい評価を下したのである。そこで、彼は最大限の解決策を講じた。

☆ ロシアの目的は何なのか？

確かに、ウクライナの人々に向けられたものではありません。プーチンは何度も何度もそう言っている。それは、実際に表れています。ロシアはウクライナへのガス供給を続けている、ロシアはそれを止めていない。インターネットを遮断したわけではありません、発電所や水源を破壊したわけでもない。

ただし、戦闘地域ではそのようなサービスは停止しているかもしれません。しかし、ロシアの戦争に対する考え方は、アメリカのそれとは大きく異なります。旧ユーゴスラビア、イラク、リビアでの例があります。欧米諸国がこれらの国を攻撃したとき、まず水や電気の供給、インフラ全体を破壊した。

☆ なぜ、欧米はこのような行動をとるのでしょうか？

欧米のアプローチは、その作戦ドクトリンから分析する必要があるが、インフラを破壊すれば、住民が「独裁者」に対して反乱を起こし、彼を排除することができるという考えに基づいている。第二次世界大戦中、ケルン、ベルリン、ハンブルク、ドレスデンなどドイツの都市が爆撃で破壊された時も、この戦略だった。民衆を直接狙い、反乱を起こさせたのだ。暴動で政府が力を失い、自軍を危険にさらすことなく戦争に勝利する。それは理論上のことであって、実際はまったく違うのです。

☆ ロシアのアプローチとは？

まったく違うのです。目標を明確に打ち出している。彼らはウクライナの「非武装化」と「非ナチ化」を望んでいる。素直に状況を追えば、それこそ彼らがやっていることだと分かる。もちろん、戦争は戦争であり、残念ながらその過程で必ず死者が出るのだが、数字で見るとは面白い。3月4日（金）、国連はウクライナ人市民265人が死亡したと報告した。夕方、ロシア国防省は死者数を498人と発表した。これはウクライナ側の民間人よりもロシア軍の死傷者の方が多いことを意味する。今、イラクやリビアと比較するならば、欧米が放つ戦争とは正反対である。

☆ 欧米のメディアは真実を伝えていないのでは？

欧米のメディアは、ロシア人がすべてを破壊したと主張していますが、それは明らかに事実ではありません。また、メディアはプーチンが突然ウクライナを攻撃し、征服することを決めたかのように報道しているのが気になります。アメリカは数カ月前から奇襲攻撃があると警告していたが、何も起こらなかった。ちなみに、ウクライナの情報機関やウクライナ指導者は、こうした米国の警告を繰り返し否定している。軍事報告や現場の準備をよく見れば、プーチンが2月中旬までウクライナを攻撃する意図がなかったことがよくわかる。

☆ なぜ変わったのか、何が起きたのか。

まず、いくつかのことを知らなければ、人は理解できない。2021年3月24日、ウクライナのゼレンスキー大統領はクリミア奪還の大統領令を發布した。

そして、ウクライナ軍を南から南東、ドンバス方面へ移動させ始めたのです。1年前からウクライナ南部の国境にウクライナ軍が大集結している。

ゼレンスキーは、ロシアがウクライナを攻撃することはないと常に主張していた。ウクライナの国防相も繰り返し確認している。同様に、ウクライナの安全保障理事会のトップは、12月と1月に「ロシアがウクライナを攻撃する兆候はない」と発言している。

☆ 仕掛けがあったのでしょうか？

プーチンはウクライナを攻撃したいわけではないはずだ、彼は何度もそう言っていた。明らかにアメリカから開戦の圧力があつた。米国はウクライナ自体にほとんど関心を持っていない。彼らが望んだのは、ドイツに対してNord Stream IIの閉鎖を求める圧力を強めることだった。ウクライナがロシアを刺激し、ロシアが反応すれば、Nord Stream IIは凍結されることを狙ったのだ。このようなシナリオは、オラフ・ショルツ氏がワシントンを訪れた際にも言及されており、ショルツ氏は明らかに受け入れたくない様子だった。これは私だけの意見ではなく、そのように理解していたアメリカの外交官もたくさんいます。

主要な目的の1つはノルドストリームIIであり、このパイプラインはドイツの要請で建設されたことを忘れてはなりません。主にドイツのプロジェクトです。なぜなら、ドイツはエネルギーと気候に関する目標を達成するために、より多くのガスを必要としているからです。

☆ なぜ、アメリカはこの紛争に関心を持つのか？

第二次世界大戦以来、アメリカの政策は常にドイツとロシア（あるいはソ連）がより緊密に連携するのを防ぐことであった。ドイツ人が歴史的にロシア人を恐れているにもかかわらず、である。しかし、この2カ国はヨーロッパの2大勢力です。歴史的に見れば、ドイツとロシアの間には常に経済的な関係があった。そして、アメリカは常にそれを避けようとしてきた。忘れてはならないのは、核戦争になれば、ヨーロッパが戦場になることだ。つまり、その場合、欧州と米国の利害は必ずしも一致しないことになる。1980年代、ソ連がドイツの平和運動を支援したのもそのためだ。ドイツとロシアの関係が緊密化すれば、米国の核戦略は無意味になる。

☆ なぜ、アメリカはドイツのエネルギー依存を批判するのか？

ドイツやヨーロッパのエネルギーがロシアに依存していることをアメリカが批判するのは皮肉なことである。ロシアは世界第2位の石油供給国です。アメリカは、主にカナダから石油を購入し、次にロシア、メキシコ、サウジアラビアから購入しています。つまり、アメリカはロシアに依存している部分があるのです。これは例えば、同社のロケットエンジンにも言えることだ。これでは、アメリカはたまったものではない。しかし、欧州のロシアへの依存度は気になるところです。冷戦時代、ロシアというかソ連は、ガスの契約は必ず守っていた。この点では、ロシアの考え方はスイスとよく似ている。ロシアはスイスと同じように遵法精神があり、ルールに縛られる感覚があります。感情を出さないということではなく、ルールが決まればそれに従うということです。冷戦時代、ソ連は貿易と政治を結びつけて考えることはなかった。その意味で、ウクライナに関わる紛争は、主に政治的なものである。

☆ ブレジンスキーによれば、ウクライナはユーラシア大陸を支配するための鍵になるという。この戦争で、この理論はどのような役割を果たすのだろうか。

ブレジンスキーは間違いなく偉大な思想家であり、今でも米国の戦略的思考に影響を及ぼしている。しかし、今回の危機では、この点が重要ではないと思うのです。ウクライナは確かに重要です。しかし、誰がウクライナを支配しているか、という問題は、ここでは本題ではない。ロシアはウクライナを支配しようとはしていない。ロシアにとってウクライナの問題は、他の国々と同様、戦略的なものです。

☆ どういう意味ですか？

あちこちで議論されている中で、肝心なことが無視されているのです。人々は核兵器について話しているが、まるで映画を見ているようだ。現実はやや異なる。ロシアは、NATO軍とロシアとの間に距離を置きたいと考えている。NATOの力は、アメリカの核の力にほかならない。それがNATOの本質なのです。

私がNATOで働いていたとき、当時私の上司だったイェンス・ストルテンベルグは、「NATOは核保有国だ」とよく言っていました。現在、米国はポーランドとルーマニアに、MK-41発射システムを含むミサイルシステムを配備している。

☆ この武器は防御用なのですか？

もちろん、アメリカは純粋に防衛的なものだと言っている。実は、このランチャーから対弾道ミサイルを発射することができるのです。でも、同じシステムで核ミサイルを発射することもできるんですよ。こ

これらのランプは、モスクワからわずか数分のところにある。ヨーロッパの緊張が高まっている状況で、ロシアが衛星画像や情報によって、これらのプラットフォームでの発射準備を示す活動を検知した場合、核ミサイルがモスクワに向けて発射されるまで待つのでしょうか。もちろん、そんなことはありません。すぐに先制攻撃を仕掛けてくるだろう。このような状況は、アメリカがABM（弾道ミサイル防衛条約）を脱退した後、さらに悪化した。この条約により、ヨーロッパにそのようなシステムを配備することはできなくなった。まさに、対峙したときに一定の反応速度を保つための工夫だったのです。それは、意図しないミスが起こりうるからだ。

冷戦時代にもそんなことがありましたね。核ミサイルの間隔が広ければ広いほど、反応する時間が長くなります。ロシア領土にミサイルを近づけすぎると、ロシアは攻撃されたときに対応する時間がなくなり、より早く核戦争に突入してしまう危険性がある。このことは、近隣のすべての国に影響を及ぼします。当時のソビエトは、このことに気づいていたからこそ、ワルシャワ条約を作ったのだ。

最初はNATOだった... NATOは1949年に、ワルシャワ条約はそのわずか6年後に設立された。その理由は、FRGの再軍備と1955年のNATO加盟であった。1949年の地図を見ると、NATOの核戦力とソ連の核戦力の間非常に大きな差があることがわかる。NATOがドイツを含めてロシアとの国境に進出すると、ロシアはワルシャワ条約で対抗した。この頃、東欧諸国はすべて共産主義で、それぞれの共産党の支配下にあった。ソ連は自国の周囲に安全保障のベルトを張り巡らせたかったので、ワルシャワ条約を作ったのです。グラシ（要塞化された防衛施設）を維持し、できるだけ長く通常戦ができるようにしたかったのだ。それは、できるだけ長く通常戦争を行い、核武装をしないようにすることだった。

☆ 現在もそうなのでしょうか？

冷戦後、核戦略はやや忘れ去られていた。安全保障は、もはや核兵器の問題ではなくなっていたのだ。イラク戦争、アフガニスタン戦争は通常兵器による戦争であり、核の次元は見えないところにあった。しかし、ロシア人は忘れてはいない。戦略的に考えるのです。その頃、モスクワのボロシロフ・アカデミー参謀本部を訪ねたことがある。そこで、人がどう考えているかを見ることができたのです。戦時中のように戦略的に考えるのです。

☆ 今日もそうなんですか？

今日はそれがよくわかりますね。プーチンの人たちは戦略的に考えています。ロシア人には、戦略的思考、作戦的思考、戦術的思考があります。西側諸国は、アフガニスタンやイラクに見られるように、何の戦略も持っていない。これはまさに、フランスがマリで抱えている問題です。フランスは戦略も目的もなく人々を殺しているのです。マリは今、彼らが国を去ることを要求しています。ロシア人の場合はまったく違って、戦略的に考えている。彼らには目的がある。それはプーチンも同じです。

☆ メディアでは、プーチンが核兵器を実用化したと言われています。皆さんも聞いたことがありませんか？

そう、プーチンは2月27日に核戦力をレベル1警戒態勢に移行させた。しかし、これは半分に過ぎません。2月11日、12日、ミュンヘンでセキュリティカンファレンスが開催された。ゼレンスキーがいた。核兵器保有を示唆した。これは潜在的な脅威と解釈され、クレムリンに赤信号が灯ったのである。

これを理解するためには、1994年のブダペスト協定を思い出す必要がある。旧ソ連邦の領土にある核ミサイルを破壊し、ロシアだけを核保有国として残すというものであった。また、ウクライナは国境の不可侵と引き換えに、ロシアに核兵器を引き渡した。2014年にクリミアがロシアに返還されたとき、ウクライナは1994年の協定を守らないと言いました。

☆ 核兵器に話を戻すと、プーチンは実際何を言ったのか？

もし、ゼレンスキーが核兵器を取り戻したいと思っても、それはプーチンにとって受け入れがたいことであることは間違いないだろう。もし彼が国境のすぐそばに核兵器を持っていたら、警告の時間はほとんどない。マクロン大統領の訪問後の記者会見で、プーチンは、NATOとロシアの距離が小さいと、私たちが気づかないうちに複雑な事態になりかねないと明言したのです。

しかし、決定的だったのは対ウクライナ作戦の開始時で、フランスの外相が「NATOは核保有国だ」と宣言してプーチンを脅したことだ。プーチンは、核戦力の警戒レベルを上げることで対抗した。もちろん、わが国のメディアは、このことに触れていない。プーチンは現実主義者であり、地に足がついていて、目的を持っている。

☆ プーチンはなぜ今、軍事介入に踏み切ったのでしょうか？

2021年3月24日、ゼレンスキーはクリミアを武力で再征服する大統領令を発した。そのための準備を始めた。それが本心なのか、それとも単なる政治的な駆け引きなのかはわからない。しかし、ドンバス地方や南方のクリミア方面でウクライナ軍を大規模に強化したことは事実です。

もちろん、ロシア側はこの兵力の集中に気づいていた。同時に、NATOはバルト海と黒海の間で大規模な演習を実施した。当然、ロシア側は反発した。

南部軍管区で演習を行った。その後、事態は落ち着き、9月にはロシアがかねてから計画していた「ザパド21」演習を実施した。この演習は4年に1度行われます。演習終了後、一部の部隊はベラルーシ近郊に残った。これらは、東部軍管区の部隊である。そこに残っていた機材のほとんどは、今年初めに予定されているベラルーシとの大作戦のために取っておいたものだ。

☆ これに対して、欧米はどう反応したのでしょうか？

欧州、特に米国は、これをウクライナに対する攻撃力の強化と解釈した。独立した軍事専門家だけでなく、ウクライナの安全保障理事会の責任者も、当時は戦争の準備がされていなかったと述べている。10月にロシアが置いていった機材は、攻撃的な作戦を目的としたものではない。ところが、いわゆる西側の軍事専門家、特にフランスでは、これを戦争の準備と解釈し、プーチンを狂人呼ばわりするようになった。2021年10月末から今年初めまでは、このような状況でした。この問題でアメリカとウクライナのコミュニケーションの取り方は、非常に矛盾していた。米国は攻撃計画を警告し、ウクライナはそれを否定した。永久に往復することになったのです。

☆ OSCEは、ドンバスが今年2月に砲撃されたと報告しています。2月に何があったのでしょうか？

1月末になると、状況は一変したようだ。アメリカはゼレンスキーと話をし、わずかな変化が見られた。2月に入ってから、アメリカはロシアの攻撃が迫っているという話をし、攻撃シナリオを流布し始めた。国連安全保障理事会にて、アントニオ・ブリンケン氏が、米国の情報機関によるとロシアの攻撃がどのように展開されるかを解説しています。

これは、イラク攻撃前の2002/2003年の状況を思い起こさせる。そこでも、アメリカは情報分析に基づいた説明をしていたはずである。私たちが知っているように、これは真実ではなく、イラクには大量破壊兵器はなかった。実際、CIAはその仮説を確認しなかった。その結果、ラムズフェルドはCIAではなく、CIAの分析を回避するために特別に作られた国防総省内の小さな機密グループに頼ることになった。

☆ その情報はどこから来るのでしょうか？

ウクライナの文脈では、ブリンケンもまったく同じことをした。ロシアの攻勢に先立つ議論の中で、CIAや欧米の情報機関による分析が全くなかったのだ。ブリンケンが語ったことは、すべて彼が作ったチーム「タイガー・チーム」から生まれたものだ。私たちに提示されたシナリオは、情報分析によるものではなく、自称専門家が政治的意図を持ってシナリオを作り出したものだ。

こうして、ロシアが攻めてくるという噂が生まれた。そして、2月16日、ジョー・バイデンは、ロシアが攻撃しようとしていることを知っていると言った。しかし、どうしてそう思うのかと問われると、CIAやOffice of National Intelligenceには触れず、アメリカには非常に優れたインテリジェンス能力があると答えた。

☆ では、2月16日に何かあったのでしょうか？

この日、ウクライナ軍による停戦ライン、いわゆる「コンタクトライン」沿いの停戦違反が誇張されるようになった。この8年間、常に侵害はあったが、2月12日以降、特にドネツク、ルハンスク地方で爆発を含め、非常に増えている。これはドンバスにいるOSCEミッションが報告したことなので、私たちは知っています。これらの報告は、OSCEの「デイリーレポート」で読むことができる。

☆ ウクライナ軍の狙いは何だったのでしょうか。

これは確かにドンバスに対する攻撃の最初の段階であった。砲撃が激しくなると、両共和国の当局が民間人をロシアに避難させ始めた。セルゲイ・ラブロフ氏はインタビューの中で、10万人以上の難民について言及した。ロシアでは、これが大規模な作戦の始まりと見なされていた。

☆ その結果、どうなったのでしょうか？

このウクライナ軍の行動がすべての引き金となった。その瞬間から、プーチンはウクライナが両共和国に対して攻勢をかけることが明白になった。2月15日、ロシア連邦議会（ドゥーマ）は、これらの共和国の独立を承認することを提案する決議を採択していた。プーチンは当初反応しなかったが、攻撃が激化するにつれ、2月21日、議会の要請に前向きに応えることを決めた。

☆ なぜプーチンはこのような行動に出たのでしょうか？

この状況で、ドンバスのロシア語圏の人々を守るために何もしないのでは、ロシア国民に理解されない
ので、そうせざるを得なかったのだろう。プーチンにとって、人民共和国を助けるためだけに介入しよう
が、ウクライナ全土を侵略しようが、欧米が大規模な制裁で対応することは明らかであった。まず、2つの
共和国の独立を承認し、同日、それぞれの共和国と友好協力条約を締結した。このときから国連憲章第51
条を発動し、集団的自衛権と自衛権の枠組みで2つの共和国を支援するための介入を行うことができるよ
うになったのだ。こうして、軍事介入の法的根拠を作り上げたのである。

☆ しかし、彼は共和国を助けるだけでなく、ウクライナ全土を攻撃したのでしょうか？

プーチンには2つの選択肢があった。1つは、ウクライナ軍の攻勢に対してロシア語圏のドンバスを単純
に助けること、もう1つは、ウクライナ全体を深く攻撃してその軍事能力を無力化することである。ま
た、何をやっても制裁が待っていることも考慮していた。しかし、プーチンは決してウクライナを占領し
たいとは言っていない。彼の目標は明確で、非軍事化と非ナチ化である。

☆ この目標の背景には、どのようなことがあるのでしょうか。

ウクライナはドンバスとクリミアの間の南部に全軍を集結させていたため、非武装化は理解できる。迅
速な作戦で、これらの部隊を包囲することができる。

その結果、ウクライナ軍の多くは、スラビャンスク、クラマトルスク、セベロドネツクの中のドンバス
地域の大きなポケットに取り囲まれてしまったのだ。

ロシア軍はこれを包囲し、無力化を図っているところです。

さて、いわゆるデナズィフィケーションですが、ロシア人がこれを言うとき、それは空虚な言葉ではあ
りません。ウクライナ軍の頼りなさを補うために、ウクライナは2014年以降、例えば有名なアゾフ連隊な
ど、強力な準軍事部隊を発展させてきた。でも、もっとたくさんあるんです。ウクライナの指揮下にある
そのような集団は多数ありますが、ウクライナ人だけで構成されているわけではありません。例えば、ア
ゾフ連隊はフランス、スイスなど19の国籍で構成されています。まさに外人部隊である。ロイター通信に
よると、これらの極右グループは合計で約10万人の戦闘員を擁しているという。

☆ なぜウクライナには準軍事組織が多いのですか？

2015/2016年、私はNATOと共にウクライナに滞在していました。ウクライナは大きな問題を抱えていま
した。ウクライナ軍は非戦闘行為による死傷者が多く、兵士が不足していたのです。自殺やアルコールの
問題で死傷者が出た。採用がなかなか決まらない。国連での経験を買われ、協力を依頼されました。

それで、何度かウクライナに行ったんです。要は、軍隊が住民の間で、また軍隊の中でも信用されてい
なかったということだ。そのため、ウクライナは準軍事組織をますます奨励し、発展させてきた。彼らは
右翼の過激派に突き動かされた狂信者である。

☆ この右翼的な過激さはどこから来るのでしょうか。

その起源は1930年代にさかのぼる。ホロドモールとして歴史に名を残す極度の飢饉の後、ソ連権力への抵抗勢力が出現した。スターリンは、ソ連の近代化を進めるために、農作物を没収し、飢饉を引き起こしていた。この政策を実行したのが、KGBの前身であるNKVD（当時は内務保安省）である。NKVDは領土単位で組織されており、ウクライナでは多くのユダヤ人がトップの指揮官を務めていた。

その結果、共産主義者への憎悪、ロシア人への憎悪、ユダヤ人への憎悪と、すべてが一つのイデオロギーに混同された。最初の極右団体はこの頃にさかのぼり、現在も存在している。第二次世界大戦中、ドイツ軍はステパン・バンデラのOUN（ウクライナ民族主義組織）やウクライナ反乱軍など、これらのグループを必要としていた。ナチスはこれらの組織を利用して、ソ連後方で戦いました。

当時、第三帝国の軍隊は、1943年にソビエトからハリコフを解放した第2SS機甲師団「ダス・ライヒ」のように解放者とみなされ、現在もウクライナで祝典が開かれている。この極右の抵抗運動の地理的な震源地は、旧ガリシアのリヴォフ（現リヴィウ）であった。この地域には、ウクライナ人だけで構成された「独自の」第14戦車擲弾兵ガリツィア親衛隊師団もあった。

☆ 第二次世界大戦中に結成されたOUNは、ソ連時代を生き抜いた？

第二次世界大戦後、敵はソビエト連邦だった。ソ連は、戦時中、これらの反ソ連運動を完全に排除することはできなかった。アメリカ、フランス、イギリスは、OUNが有用であることを認識し、破壊工作と武器でソ連と戦うためにOUNを支援した。1960年代初めまで、ウクライナの反政府勢力は、エアロダイナミック、ヴァリュアブル、ミノス、カパチョなどの秘密作戦を通じて、西側から支援を受けていた。

それ以来、ウクライナは欧米やNATOと密接な関係を保っている。現在では、ウクライナ軍の弱体化により、狂信的な極右部隊が使われるようになっている。ネオナチという言葉は、非常によく似た思想を持ち、そのシンボルを持ち、暴力的で反ユダヤ的であるが、完全に正確ではないと思う。

☆ 2014年以降、ウクライナ情勢を沈静化するために2つの協定が結ばれましたが、今回の紛争との関連で、この協定の意義は何でしょうか？

そう、この2つの合意事項の違反が、基本的に今日の戦争につながったのですから、これを理解することが重要です。2014年以降、紛争には解決策があったはずで、この解決策はミンスク協定にありました。2014年9月、ウクライナ軍はNATOの助言を受けながらも、もはや紛争を管理することができなくなった。定期的に故障していたのです。そのため、2014年9月にミンスクI協定にコミットする必要があった。これは、ウクライナ政府とドネツク、ルガンスクの2つの自称共和国の代表が、欧州とロシアの保証人のもとで合意したものである。

☆ この2つの共和国の誕生は、どのような経緯で実現したのだろうか。

それを理解するためには、この物語を少し遡る必要がある。2013年秋、EUはウクライナとの貿易・経済協定の締結を希望していた。EUはウクライナに補助金で、輸出入で、発展の保証をしていたのです。ウクライナ当局は、この取引を成立させたいと考えていた。しかし、これには重大な問題があった。ウクライナの産業と農業は、ロシアに向いていたのだ。例えば、ウクライナ人が開発したエンジンは、ヨーロッパやアメリカの航空機用ではなく、ロシアの航空機用だった。つまり、産業界の一般的な方向性は、西向きではなく東向きだったのだ。品質面でも、ウクライナはヨーロッパの市場にはとても勝てない。

そのため、ロシアとの経済関係を維持したまま、EUに協力したいというのが当局の意向であった。

☆ それは可能だったのでしょうか？

ロシア側としては、ウクライナの計画を問題視していなかった。しかし、ウクライナとの経済的な関係を維持したいとも考えていた。そこで、ウクライナとEUの間の協定と、ウクライナとロシアの間の協定の2つを作成する三者ワーキンググループの設立を提案した。すべての関係者の利益をカバーすることが目的でした。しかし、バローゾ委員長を通じて、ウクライナにロシアかEUかの選択を求めたのは、EUだったのである。ウクライナは、解決策を考える時間をくれと言った。その後、EUとアメリカはフェアプレイをしなかった。

☆ なぜ？

欧米のマスコミは「ロシアがウクライナに圧力をかけ、EUとの条約を阻止する」という見出しをつけた。これは事実ではなかった。ウクライナ政府は、EU条約に関心を示し続けたが、単にこの複雑な状況の解決策を検討するための時間が欲しいだけであった。しかし、ヨーロッパのメディアはそう言わなかった。その後、キエフのマイダンには、西側から右翼の過激派が現れました。欧米の承認と支援を受けてそこで起こったことは、すべて本当にひどいものです。しかし、ここですべてを詳しく説明するのは、1回のインタビューでは無理があります。

☆ 民主的に選ばれたヤヌコビッチ大統領が倒された後、何が起こったのか。

極右民族主義者のクーデターから生まれた新暫定政府は、その最初の公式行動として、ウクライナの言語法を変更しました。このことは、クーデターが民主主義とは何の関係もなく、蜂起を組織した超国家主義者の産物であったことを物語っている。

この法改正は、ロシア語圏に嵐を巻き起こした。オデッサ、マリウポリ、ドネツク、ルガンスク、クリミアなど、南部のロシア語圏のすべての都市で大規模なデモが組織されたのである。ウクライナ当局は、軍隊で弾圧するという残忍な対応をした。オデッサ、ハリコフ、ドニエプロペトロフスク、ルガンスク、ドネツクで自治共和国が一時的に宣言された。ドネツクとルガンスクは自治共和国を名乗り、残虐な戦いが繰り広げられた。

☆ 彼らはどのように自分たちの地位を正当化していたのでしょうか。

2014年5月に住民投票を行い、自治権を持つことになったのですが、これはとてとても重要なことです。ここ数ヶ月の我が国のメディアを見ると、「分離主義者」のことばかり言っています。しかし、これは嘘です。西側メディアは常に分離主義者について話していましたが、これは嘘で、住民投票はウクライナ国内の自治について明確に言及していました。これらの共和国は、いわばスイスのような解決策を望んでいた。国民が自治に賛成した後、当局はロシアの共和国認定を求めたが、プーチン政権はこれを拒否した。

☆ クリミアも関係しているのでは？

クリミアはウクライナが独立する以前から独立していたことを、私たちは普段から忘れています。ソ連がまだ存在していた1991年1月、クリミアはキエフからではなく、モスクワから管理される形で住民投票を実施した。そして、ソビエト社会主義自治共和国になったのである。ウクライナの独立を問う住民投票が行われたのは、それから半年後の1991年8月である。当時、クリミアはウクライナの一部とは見なされていなかった。しかし、ウクライナはこれを受け入れなかった。

1991年から2014年にかけては、この2つの主体の間で常に争いが起きていた。クリミアには独自の憲法があり、独自の当局があった。1995年、ブダペスト・メモに後押しされて、ウクライナはクリミア政府を軍事力で転覆させ、憲法を破棄した。しかし、このことは、現在の展開にまったく別の光を当てることになるため、決して語られることはない。

☆ クリミアの人々は何を望んでいたのか？

実際、クリミア人は自分たちを独立した存在だと考えていた。キエフから押し付けられた政令は、1991年の住民投票と完全に矛盾しており、ウクライナで超民族主義の新政権が誕生した後の2014年に、クリミアが新たに住民投票を実施した理由もここにあります。その結果は、30年前と非常によく似ていた。

住民投票の後、クリミアはロシア連邦への加盟を求めた。クリミアを征服したのはロシアではなく、当局にロシアへの受け入れを依頼する権限を与えた国民である。1997年に締結されたロシアとウクライナの友好条約で、ウクライナは国内の少数民族の文化的多様性を保障した。2014年2月にロシア語が公用語として禁止されたとき、この条約が破られることになったのです。

☆ このようなことを知らない人は、状況を見誤る危険性があるのでしょうか？

ドンバス共和国の自治は、ミンスク合意で保証されていたように思います。保証人は、ウクライナ側はドイツ、自称ドネツク共和国・ルハンスク共和国側はフランスとロシアであった。その役割は、OSCEの枠組みの中で果たされていた。EUは関与しておらず、OSCEの問題であった。ミンスクI協定の直後、ウクライナは2つの自治共和国に対して作戦を開始した。ウクライナ政府は、せっかく締結した協定を完全に無視した。ウクライナ軍はデバルツェボで再び完敗を喫した。大失敗だった。

☆ これもNATOの支援で行われたのでしょうか？

そう、そして、反乱軍の軍隊がウクライナ軍を完全に打ち負かしたので、NATOの軍事顧問団は何をしたのだろうかと思う。これが2015年2月に締結された

第2次合意「ミンスクII」につながり、国連安保理決議の根拠となった。したがって、この合意は国際法の下で拘束力を持ち、実施されなければならなかった。

☆ これも国連が監視していたのですか？

いや、誰も気にしていなかったし、ロシアを除けば、誰もミンスク II 協定の遵守を要求していなかった。突然、ノルマンディー方式の話ばかりになった。しかし、それでは意味がない。その「形式」は、2014年6月のD-Dayの記念式典の際に生まれました。第二次世界大戦の元主役、連合国の首脳、そしてドイツとウクライナが招待された。ノルマンディー方式では、国家元首だけが代表で、自治共和国は当然欠席であった。ウクライナは、ルガンスクやドネツクの代表者と話をしたがらなかった。しかし、ミンスク合意を読めば、ウクライナの憲法を（連邦的な意味で）改正するために国民投票を実施すべきだったことがすぐにわかるでしょう。この内部プロセスは、ウクライナ政府によって阻止された。

☆ しかし、ウクライナ人も協定に署名したのですか？

ウクライナは自国の問題をロシアになすりつけることにしたのです。ウクライナ側は「ロシアがウクライナを攻撃した」と主張し、それが問題の根源であるとした。しかし、訪問した私たちにとって、それが国内の問題であることは明らかでした。2014年以降、OSCEの監視員はロシア軍部隊を見たことがない。

どちらの合意も、解決策はウクライナ国内で見つけなければならない、という非常に明確で正確なものです。国内にある程度の自治権を認めるということであり、その問題を解決できるのはウクライナだけである。ロシアとは関係ない。

☆ そのために、憲法の調整が必要だったのでしょうか？

そう、その通りなのだが、それができていなかった。ウクライナは、この点に関して何の措置もとらなかった。国連安全保障理事会のメンバーもコミットしていない。

☆ ロシアはどのような行動をとったのでしょうか。

ロシアの立場はいつも同じだ。ミンスク合意の履行を望んでいた。8年間、その立場を変えることはなかった。この8年間に何度も国境を侵犯され、砲撃などもあったが、ロシアは合意の履行に疑問を呈したことはない。

☆ ウクライナはどのように進めたのですか？

ウクライナでは、昨年7月初めに法律が成立しました。それは、民族によって国民に異なる権利を与えるという法律でした。この法律は、1935年のニュルンベルク人種法を彷彿とさせるものである。真のウクライナ人だけが完全な権利を持ち、それ以外の人は限られた権利しか持っていません。

この直後、プーチンはウクライナの歴史的な成り立ちを説明する記事を書いている。ウクライナ人とロシア人を区別することができるかと批判した。

この法律を受けて記事を書いたのだ。しかし、ヨーロッパでは、これはウクライナを国家として認めていない、彼の記事はウクライナ併合の可能性を正当化しようとしていると解釈された。欧米ではこれ信じて、プーチンの論文を読んだ人は、片手の指で数えられるほどだ。欧米では、プーチンのイメージをできるだけネガティブにすることが目的だったことは明らかだ。

☆ ロシア人はプーチンに何を期待したのだろうか？

ウクライナにはたくさんのロシア人がいます。プーチンは何か言わなければならなかった。ウクライナ・ロシア人を差別する法律を前にして、彼の国民が何も言わないというのは（国際法の観点からも）正しくなかっただろう。このような小さな積み重ねが重要で、そうでなければ何が起きているのかわからないのです。プーチンの行動を整理し、戦争を誘発するメカニズムを見抜くには、これしかない。プーチンが良いのか悪いのか、私にはわかりません。

しかし、西洋で我々が下す彼への判断は、明らかに誤った要素に基づいている。

☆ 中立の立場を崩したスイスの反応について、どう思われますか？

災難でしたね。ロシアは48の「敵対国」リストを作成し、スイスもその中に入っている。これはまさに画期的な変化であり、スイス自身の責任でもあるのです。スイスは常に「中庸のキャラクター」である。私たちは、すべての国との対話を促進し、「中間に位置する」勇気を持ってきました。制裁に対するヒステリーがある。ロシアはこの状況に対して非常によく準備している。苦しむだろうが、彼らの影響に耐えられるように準備している。しかし、制裁の原則は全く間違っている。現在では、外交に代わって制裁が行われている。

ベネズエラ、キューバ、イラク、イランなどでも見られたことです。これらの州は、米国が喜ばない政策をとっているだけで、何もしていない。障害者アスリートがパラリンピックの出場停止処分を受けたことを知り、私は言葉を失いました。まったくもって不謹慎な話です。個々の人間に影響を与える、それは単なる曲解です。フランスの外務大臣が「ロシア国民は制裁を受けなければならない」と言うのと同じくらい残酷な話だ。このようなことを言う人は、私の目には名誉がありません。戦争を始めることには何のプラスもないが、このような反応をするのは、ただただ情けないことだ。

☆ ウクライナでの戦争に反対する人々が街頭に立つとき、あなたはどのように思いますか？

ウクライナでの戦争が、イラク、イエメン、シリア、リビアに対する戦争よりも悪いのはなぜか、と私は自問している。イエメンやリビア、アフガニスタンのために誰がデモをしているのでしょうか？なぜアメリカがアフガニスタンにいたのか、私たちは知りません。私は情報筋から、アフガニスタンやオサマ・ビンラディンが9・11テロに関与しているという明確な兆候はなかったことを知っていますが、とにかくアフガニスタンで戦争をしたのです。

☆ ところで、なぜ私たちはアフガニスタンで戦争をしたのでしょうか？

2001年9月12日、同時多発テロの直後、アメリカは報復を決意し、アフガニスタンに空爆を行った。米空軍参謀総長は、アフガニスタンには十分な目標がないと述べた。これに対して国防長官は、「アフガニスタンに十分な目標がないのなら、イラクを爆撃する」と答えた。これは私が作り上げたものではなく、情報源や資料、その場にいた人たちがいるのです。これが現実なのですが、プロパガンダや操作によって、私たちは永久に「正しい」側に偏ってしまうのです。

☆ あなたの回答から、西側諸国は長い間、火に油を注ぎ、ロシアを挑発してきたと思いますが、こうした挑発は我々のメディアでは、ほとんど報道されず、プーチンは温情主義者、怪物のように描かれているのでしょうか？

私の祖父はフランス人で、第一次世界大戦の兵士でした。彼はよく私に、この戦争がどうして始まったのか、それは集団ヒステリーの刺激の産物であると言った。欧米の政治家たちのヒステリー、操作、思慮のない行動は、1914年に起こったことと非常によく似ていて、とても心配です。中立国である我が国が、EUやアメリカから独立した立場をとることができなくなっているのを見ると、恥ずかしくなります。私たちは冷静で理性的で、メディア騒動の背後にある事実を知る必要があります。

<https://www.lahaine.org/mundo.php/militar-suizo-experto-de-la>

Militar suizo, experto de la ONU, analiza con bisturí la guerra en Ucrania Entrevista con Jacques Baud, coronel del ejercito suizo, experto en inteligencia militar y adjunto en la OTAN y la ONU :: "El enfoque bélico ruso es muy diferente al de EEUU" www.lahaine.org

【ウクライナ東部情勢激化】

OSCE監視団、2月18日に1500回強の停戦違反を確認 昨年平均の6倍

<https://www.ukrinform.jp/rubric-defense/3407846-ukuraina-dong-bu-qing-shi-ji-hua-jian-shi-tuan-yuerinihui-qiangno-ting-zhan-wei-fanwo-que-renzuo-nian-ping-junnobei.html>

【ウクライナ東部情勢激化】

OSCE監視団、2月18日に1500回強の停戦違反を確認 昨年平均の6倍ウクライナ全土の監視活動を行っている欧州安全保障協力機構（OSCE）ウクライナ特別監視団（SMM）は、2月17日夜から18日夜までの24時間の監視機関で、ドネツィク・ルハンシク両州にて、1566回の停戦違反を確認したと発表した。これは、2021年の1日平均停戦違反数の約6倍となる。 - ウクルインフォルム。 www.ukrinform.jp

【抜粋】

2021年10月26日、ウクライナ政府軍は親露派との紛争地域で親露派武装勢力にドローン攻撃を実施した。ドローンによる攻撃は、ミンスク2から強化された2020年7月の協定で禁止された違反行為であったため、ロシアからの批判だけでなく、欧米諸国からも異を唱えられた。その禁止行為はロシア軍が行動に移すための口実となった。緊張は高まり続け、2022年2月10日にロシア、ウクライナ、フランス、ドイツのノルマンディー・フォーマット（英語版）参加国外相はドイツの首都ベルリンでミンスク合意などをめぐり高官協議を開くも、ロシアは完全履行を、ウクライナは項目の修正などを求め、合意に至らなかった。21日にロシアのプーチン大統領が「（履行されないのであればミンスク合意は）もはや存在していない」として、合意の破棄を明言した。24日にはウクライナの非軍事化を目的とした特別軍事活動を承認し、ロシア軍によるウクライナへの全面侵攻が開始された。

<https://t.co/RMcNTgV4Cm>

<転載終了>